

# 大雪山国立公園ビジョン策定 協働型管理運営体制構築 記念シンポジウム 議事録

■日 時：令和3年3月18日（木）13：00～16：00

■場 所：上川町役場大会議室

■出席者：（敬称略）

- ・コーディネーター：北海道大学大学院農学研究院准教授 愛甲哲也
- ・パネリスト：北星学園大学専任講師 ロバート・トムソン、（株）りんゆう観光代表取締役社長 植田拓史、一般社団法人大雪山・山守隊 代表理事 岡崎哲三、屋久島町 観光まちづくり課 統括係長 木原幸治(Web参加)、イラストレーター 鈴木みき(兼 ビデオ出演者)、大雪山国立公園管理事務所長 榎 厚生
- ・参加者：大雪山国立公園連絡協議会会長 上川町長 佐藤芳治(収録映像)、上川町役場 商工観光グループ 課長補佐 藤井吉光 / 主任 三浦大輝、一般社団法人大雪山・山守隊 下條典子、北海道地方環境事務所 所長 安田直人 / 統括自然保護企画官 大林圭司 / 国立公園課長 福井智之 / 係員 後藤俊矢、大雪山国立公園管理事務所 国立公園利用企画官 佐藤 巧 / 係員 松野壮太 / 自然保護官補佐 忠鉢伸一、東川管理官事務所 国立公園管理官 齋藤明美 / 自然保護官補佐 渡邊あけみ、上士幌管理官事務所 国立公園管理官 橋口峻也 / 自然保護官補佐 上村哲也
- ・ビデオ出演者：山岳ガイド・山岳スキーヤー 佐々木大輔、上川町町おこし協力隊員 小野加奈子 / 近江美久、帯広市職員 小泉勇介、NPO 法人コミュニティワーク研究実践センター職員 行方史織

## 1. 開会

### ■大雪山国立公園連絡協議会会長 佐藤町長(収録映像)

- ・本日のシンポジウム参加に感謝。大雪山国立公園連絡協議会は国立公園関係行政機関、観光協会、交通事業者、自然保護団体、研究者からなる協議会で、昨年6月に官民が連携し、現在の体制になった。同時に、大雪山国立公園ビジョンを策定し、豊かになった国立公園を末永く利用し、将来世代に引き継いでいくという目標を掲げた。このことにより関係者と管理者は共通の目標を共有した。
- ・しかし、山岳地域の荒廃や利用拠点の低迷等の課題を解決し、ビジョンを実現するためには利用者との連携、協働が不可欠である。
- ・今日は国立公園の管理運営に関する方策を利用者とともに考えていきたい。このシンポジウムを契機として、大雪山国立公園ビジョンが浸透し、山岳地域の管理が充実し、利用拠点が更に賑わうことを願う。

## 2. 趣旨説明

### ■大雪山国立公園管理事務所 榎所長

- ・シンポジウムをより深く理解してもらうため、趣旨説明として3つの話しをしたい。まず、大雪山国立公園連絡協議会が改組され、協働型管理運営体制がととのえられたこと。次に将来目標であるビジョンが策定されたこと。そして、ビジョン達成のためには利用者参加が不可欠であると

いうことである。

- ・大雪山国立公園は多様な景観要素をもち、高い生物多様性があり、また、日本では唯一の広大で原生的な山岳景観を有している。また、温泉利用や登山利用を通じ、原生的な景観を楽しむことができ、利用価値の面においても優れている。
- ・歴史を振り返ると、大雪山国立公園は、自然資源の価値を科学的に明らかにし、保全を図ってきた地域であるということを我々は再認識する必要がある。特に大正時代の大雪山調査会の活動は有名であるが、それより遙か以前の明治末期に石狩川上流霊域保護国立公園経営の件の建白書も出された事例がある。こういったことは大雪山国立公園の先進性を示す証拠であると考えられる。
- ・その後、戦後の経済成長期の大規模開発と自然保護との調整の時代を経て、現在は価値を損なわない範囲で、持続可能な利用が重要であるという認識を利用者が持つに至った。
- ・現在、大雪山国立公園は深刻な課題に直面している。気候変動の影響による紅葉の色づきの低下や、降水量の増加、人口減少や高齢化、ライフスタイルの変化、価値観が多様化し、外国人利用者が増加等の社会的な変化による山岳地域における登山道の浸食、し尿の排せつや散乱の問題、また、麓の利用拠点においては旅行形態の変化に対する対応や情報発信が不十分であるということである。
- ・大雪山国立公園連絡協議会ではビジョンを策定すると同時に、大雪山国立公園のあるべき姿を4つに整理した。1つめは「大雪山の自然環境が守られ、より豊かになった国立公園」、2つめは「魅力を活かし、質の高い利用体験ができる国立公園」、3つめは「つながっていく国立公園」、4つめは「みんなが協働して管理運営する国立公園」である。これらにより、課題を解決しようと考えた。また、ビジョン実現のために、管理運営体制も大きく変更した。従来、大雪山国立公園連絡協議会は環境省、北海道、地元市町により構成されていたが、民間団体が参画することにより、行政、民間が連携する体制を整えた。また、登山道関係者は以前より情報交換会を開催していたが、登山道維持管理部会としてその取組を維持していくことになった。取組としてはビジョンの共有、携帯トイレの普及活動、管理運営計画の検討、協力金の取組、情報発信等をおこなっている。
- ・社会環境や自然環境が大きく変化するなかで、関係者の努力だけでは大規模化した山岳地域の荒廃等の課題は解決できない。国立公園の管理は公的資金で賄ってきたが、山岳地域の荒廃は進む一方で社会保障に多額の公的資金を充当せざるを得ない状況にあるため、そればかりに頼ることが困難になってきている。そのための知恵やアイデアを皆で出し合っていきたい。重要なことはビジョンを関係者だけのものではなく、利用者と共有することである。本日のシンポジウムでは利用者に何ができるかを考えていきたい。

### 3. 講演「大雪山国立公園が世界を魅了するために」

#### ■北星学園大学専任講師 ロバート・トムソン氏

- ・今日は一人の利用者として個人的意見を話したい。また、後半のパネルディスカッションにおいてその話題を広げていきたい。発表では、まず利用者による2018年から運営している情報発信の例について、次に大雪山国立公園の魅力について、そして利用者として感じた課題について話したい。
- ・自分は大自然が好きで、2006年から中央アジア経由で1年かけてユーラシア大陸を横断した。その後、スケートボードでアメリカ、中国を横断した。その後、北海道大学で修士課程および博士

課程を修了し、現在は北星学園大学で勤務している。

- 2018年から運営している HOKKAIDO WILDS (URL: <https://hokkaidowilds.org/>) というウェブサイトを通じ、英語話者を対象に北海道のアウトドア情報を無償で発信。ウェブサイトではスキー登山、夏登山、自転車ツーリング、カヌーの4種類、計約270本のルートを開示している。本業ではないため、週末等を利用し、すべての取材は自分たちのチームで行っている。
- ウェブサイトを立ち上げた動機について話したい。カミホロメトックを訪れた際、富良野岳にむかうジャンクションで悪天候の中、イギリス人の2人組と偶然出会い、十勝岳温泉への行き方を聞かれた。彼らは地図をポケットから出したが、雨でにじんだ手書きの粗末な物で、ほとんど見えなくなっていた。この事例に危機感を感じたため、その後、国土地理院の英語表記地形図を来訪者が訪日前にダウンロードできるよう、無償提供を始めた。現在は4人チームでウェブサイトの運営、および取材を行っている。サイトは Inspiration、Information、Education の3つの柱で運営している。また、山岳遭難データベースも英訳し、発信している。
- 現在、ウェブサイト上でスキー登山ルート11本、夏登山ルート18本、自転車ルート4本、カヌールート1本を開示している。(ここで、視聴者がスライドの写真4枚がどこの場所かを当てる、Q&AセッションをYouTubのコメント機能を用いて行う。答えはAがトムラウシ、Bが三段山、Cがペンケニコロベツ林道、Dが然別湖。)
- 欧米豪からの北海道外国人宿泊者数は2008年と2017年を比較すると、2.5倍にもなっている。アジアからの来訪者を加えるとこの数は更に大きくなると思う。現在はコロナ禍にあるが、北海道の魅力は発信し続けている。ウェブサイトの閲覧者数は多いときで月間1万人を超える事もあったが、現在は激減している。その一方で、SNSの発信に対するLIKE数、SHARE数、コメント数等のエンゲージメント数はむしろ増加している。これは北海道のファンが北海道の情報を求めることの表れではないかと分析している。インバウンドの見通しを予測することは難しい。来年の春頃には回復していればいいと個人的には思っている。
- 大雪山の魅力についてであるが、北海道を考える場合、自分は日本の一部としては捉えていない。むしろカムチャッカ、シベリア、サハリンを含む北方地域の一部として考えている。キーワードとしては「厳しい環境」、「自然との闘い」、「支配者は自然」であり、RAW「生」、「上級者向け」をイメージし、旅行者はそこに魅力を感じている。
- 大雪山について感じるもう一つのこと、大雪山はカナダやアラスカのような「本当のウィルダネス」ではないということである。カナダのように飛行機で入域し、その後3週間カヌーで川下りをするというような活動は大雪山では行われていない。大雪山グランドトラバースでも5、6日間もあれば実施可能である。ただ、それが悪いわけではなく、大雪山の良いところは大自然に容易にアクセスできることにある。自転車で走ることのできる林道や、ワイルドな温泉、世界一のパウダースノー、美しい原生林がすぐ身近にある。また、外国人にとっての北海道の魅力の1つは、大自然の中で、異文化体験ができることにもあり、山岳標識が日本語や日本で使われているマーク(♨)で書かれていることそれ自体も異文化体験になる。
- 大雪山の課題であるが、特に外国人にとっては、英語の情報が少ないことである。アドベンチャー・トラベル・アソシエーションの研究によれば、アウトドア・トラベラーのガイド利用率は56%と低い。また欧米豪旅行者の滞在日数はアジア人旅行者と比較し、滞在日数が長い。そのため、マイナーな場所でも自分で情報収集し、プランを立てられる情報源を持つことが極めて重要である。大雪山グレードのシステムは大成功だと考える。これにより、自分に合ったルート作成

ができる。

- ・もうひとつの課題は設備である。裾合平は大雪山の看板ルートであるにも関わらず、木道の状態がひどいまま放置されている。また、今後、替える予定があるかもしれないが、標識も仮設のものである。「北海道の自然環境は厳しいからしょうがないですね」という言葉を良く聞くが、ニュージーランドでは財産の耐用年数見込みが作成されており、標識は8年、登山道は10年と決められていて、常に維持が必要という認識がある。財源確保の一例として、ニュージーランドの南島にあるフィヨルドランド国立公園の登山道では2泊3日のロングウォークに対し、利用者から一泊あたり8,600円の入山料を徴収している。自分が幼少のころ、このような高額な入山料はなかったが、一昨年現地を訪れた際、良く整備されたボードウォークを見てその使途に納得したため、高額だと感じなかった。
- ・「自然は誰でも無料でアクセスできるものであるべき」という声を聞くが、場所によってはニュージーランドではそのような時代ではなくなっている。大雪山でもこのような考え方が必要ではないか。自分は山小屋が好きであるが、無料の山小屋はおかしいと考える。誰かが費用負担しているからである。
- ・大雪山国立公園連絡協議会、一般社団法人大雪山・山守隊、NPO法人かむい等の関係団体が大雪山国立公園を世界級のデスティネーションにするためには持続可能な収入システムが必要である。
- ・最後の課題としては「冬」が掲げられる。多くの欧米豪の旅行者は冬季に北海道に来訪するが、バックカントリースキーヤーたちの路上駐車が問題となっている。すぐに解決できる問題ではないかもしれないが、今後視野に入れるべき課題である。

#### ■視聴者

- ・現状の登山者数やオーバーユースについて、どのように対応すればいいか。

#### ■北星学園大学専任講師 ロバート・トムソン氏

- ・自分の専門外であるため、専門家の意見も聴きたいが、ニュージーランドの場合は入山者数を制限したり、入山料によって自然を守る等の取組を実施している。

### 4. 交流会（インタビュー映像放映）

#### ■出演者：山岳ガイド・山岳スキーヤー 佐々木大輔氏、上川町町おこし協力隊員 小野加奈子氏 / 近江美久氏、帯広市職員 小泉勇介氏、NPO法人コミュニティワーク研究実践センター職員、行方史織氏

- ・登山を始めたきっかけ、大雪山国立公園の魅力、大雪山を登山していて気になったこと、登山道整備イベントに参加したきっかけ、参加したいと思う登山道整備イベント、協力金や募金について、世界を魅了する国立公園にするためにはどんなことが必要か、未来の大雪山国立公園へのメッセージについてなどのインタビュー。

### 5. パネルディスカッション

#### ■事務局

- ・国立公園の管理運営に長く携わっている立場から愛甲准教授にコーディネーターをお願いした。

#### ■北海道大学大学院農学研究院 愛甲准教授（コーディネーター）

- ・本日のシンポジウムは昨年開催予定であったが、コロナ禍により1年の延期を余儀なくされた。令和2年6月に作成された大雪山国立公園ビジョンの作成と、協議会の官民協働型改組を記念す

るシンポジウムという位置づけになる。今日は大雪山の魅力と課題、その課題解決について話したい。また、ビジョンをどう実現して行くかというアイデアについても考えたい。

- ・自己紹介であるが、専門は造園学、山守隊の理事をつとめ、山のトイレを考える会にも所属している。
- ・2014年に日本の協働型管理体制における方向性の転換があった。それまでの国立公園は行政だけが管理していて、問題が起こる都度、個別の協議会を作って対応してきたが、2014年に民間の参画が必要であるという提言が専門家委員会からなされた。大雪山国立公園もその方向性に対応するかたちで、管理計画を改訂し、管理運営計画を作成している。管理運営計画の内容、特に利用者参加については現在検討中。本日のディスカッションの内容もその中で検討されると考えるので、YOUTUBEを通じての書き込みも願いたい。まず、背景も含め、桝所長に現在の大雪山国立公園の課題と、取組について、自己紹介も含め、説明を求めたい。

#### ■大雪山国立公園管理事務所 桝所長

- ・パネルディスカッションの趣旨であるが、まず何よりも山岳地域の荒廃、施設や登山道の荒廃等の問題が深刻になってきている。荒廃を食い止め、ビジョンを実現するためには資金と人手が必要になる。行政機関も予算等で努力はしているが、荒廃の規模は我々の力を上回っている。一方、登山道補修などのイベント等を行うと、積極的に参加する一般の人、民間の人も見られ、力になりたいと考える利用者も増えてきた。今後は利用者参加する形の管理運営が必要と考える。そのために何ができるのかを、このパネルディスカッションで考えていきたい。

#### ■北海道大学大学院農学研究院 愛甲准教授（コーディネーター）

- ・それぞれのパネリストに桝所長からの趣旨説明に対する意見を、普段の活動も含め、聞きたい。

#### ■一般社団法人大雪山・山守隊 岡崎代表理事

- ・自分は登山道の整備を行っている。26年前に黒岳石室で働く機会があり、その時に登山道のもろさを実感した。自分も登山道を壊していることを自覚し、技術を身につけることで修復できると考えたが、1日5メートルくらいしか補修できない事に気づき、圧倒的な荒廃の進行を食い止めるには技術だけでは問題が解決しないことを実感した。そこで同じ問題意識を持つ、登山者をつないでみようと考え、一般社団法人大雪山・山守隊を立ち上げた。大雪山をより魅力的にした。

#### ■（株）りんゆう観光 植田社長

- ・黒岳ロープウェイの経営と、黒岳石室、愛山溪倶楽部の受託運営をしている。そういう意味で自分は山に近いところで商売をしている。今日は営利企業の参加者として話しをしたい。民間企業の場合、ビジョンの「活かし」に重きを置くが、山のおかげでビジネスをおこなっているという認識がない事業者もいると思う。民間事業者の協議会への参加は、そういった意識を変えることにもつながると考える。これからは、地域のみならず、十勝や富良野等の他地域の事業者とも足並みをそろえていきたい。

#### ■鈴木みき氏

- ・北海道に引っ越してきて3年が経つ。今日は本州の登山者という目線で話したい。自分は登山に関するコミックエッセイを書いている。出版を手がけたのは12年ほど前になる。それ以前は登山小屋やスキー場のアルバイトや登山雑誌の取材同行をやってきた。現在は読者を中心とした登山ツアーの企画同行もおこなっている。

#### ■北海道大学大学院農学研究院 愛甲准教授（コーディネーター）

- ・登山道整備についてどう思うか。

#### ■鈴木みき氏

- ・ツアー参加者は興味を示すと思う。一般の登山者はどのように登山道が管理されているのかを余り理解していないと考えるが、登山道の荒廃は気づいていると思う。登山道がきれいになるのであれば、協力金も払いたいと考えている登山者が多いと感ずる。

#### ■北海道大学大学院農学研究院 愛甲准教授（コーディネーター）

- ・トムソン氏の講演は大雪山の魅力や課題に関し示唆に富んだものであった。中でも個人的にうれしかったのは大雪山グレードがすばらしいという発言が聞けたことであるが、世界基準で考えた場合、解決しなければならない課題も多い。フィヨルドランド国立公園に行ったことがあるが、整備と管理責任をセットで考え、リスクマネジメントのシステムを構築していた。ニュージーランドでは公園全体をDOCが管理しているが、日本の場合は様々な行政が入り交じって管理している。また、道外では私有地が国立公園にある場合もある。そういうあり方をどう思うか。また、情報発信も含め、再度話しを伺いたい。

#### ■ロバート・トムソン氏

- ・外国人利用者の立場から言えば、熱心な利用者が参加料を支払ってまで登山道補修のイベントに参加する事を知り、感銘をうけた。大雪山・山守隊の活動は素晴らしいと思う。フランス人がそういったイベントに参加し、異文化交流できたことをSNSで発信しているのを見たことがある。良いと思ったが、外国人がそういった活動に参加することは極めて限られている。現実的にはほとんどの外国人旅行者は手伝えない。日本人は外国人旅行者が登山道補修にかかわらなくても、それは「おもてなし」の気持ちで寛容に捉えることができるというが、自分は「おもてなし」の気持ちには限界があると考え。YOUTUBEのコメントに「インバウンドはコロナ以前の時の半分で十分。オーバーユース。」と、書き込みされているのを読んだことがある。ニュージーランドの場合、地元民より外国人旅行者が高額の入山料を払っている。日本も外国人が金銭的貢献も含め、何らかの形で、参加できる仕組みが必要と考える。

#### ■北海道大学大学院農学研究院 愛甲准教授（コーディネーター）

- ・トムソン氏の指摘通り、「おもてなし」の気持ちには限界がある。場所にもよるが、北海道の山の場合7、8割は道外からの登山者である。うち、数パーセントは海外からの来訪者である。すなわち、地元の自治体から来ていない利用者が大半を占めることになる。今日のディスカッションでは屋久島の木原氏にWEB参加いただいている。協力金についての参考事例、また今日のディスカッションを聞いての感想をいただきたい。

#### ■屋久島町 木原統括係長

- ・大雪山の話聞いて、民間が管理に参加しているのは先進的だと感じた。協力金を担当している立場として、屋久島の事例を紹介したい。屋久島町は2つの島で構成されており、面積の約21%が世界自然遺産に登録されている。また、世界遺産登録の10年以上前にユネスコエコパークに登録され、永田浜はラムサール登録湿地として認定されている。また、屋久島は水資源が豊富なため、島で消費する電力のほぼ100%を水力で自給している。
- ・屋久島では平成29年より世界遺産屋久島山岳部環境保全協力金として登山者、趣旨賛同者、企業を対象に協力金を収受している。協力金は任意であるが、屋久島町の条例を根拠にしている。よって、管理も屋久島町が行っている。金額は日帰り千円、宿泊は2千円を目安とし、それ以上の金額も受け入れている。平成27年に条例は制定されたが、一部の反対意見もあった。用途につい

ては条例で規定しており、主にトイレの維持管理に使用され、軽微な登山道管理は行っているが、財源としては十分とはいえない。

- ・協力金制度の発端は、現町長が入島税の検討を選挙公約に掲げたことにある。入島税として観光客からひとり千円を徴収し、福祉や教育のために使うというものであった。その後、検討会を経て、入島税は税の公平、中立、簡素のという原則上、難しいであろうという考えが共有され、将来的な入島税の導入を想定しつつ、入山協力金の採用となった。
- ・協力金の収納は屋久島山岳部保全利用協議会現地事務所や屋久島観光協会が代行し、全額を屋久島町への寄付金として受け入れる。その後、屋久島山岳部保全基金に基金として積み立て、必要に応じ、取り崩し、一般会計に取り入れて執行している。基金を経由することにより、年度を跨いだ資金の活用が可能となる。
- ・協力金収受には縄文杉登山用バスのチケット料金に上乗せする方法を採用している。この方法により、収納率が格段に高くなった。登山バスを利用しない登山口では、人員配置し、協力金を収受していたが、人件費削減のため、平成31年より協力金箱を設置し、無人化している。対面式収受をやめて以来、わかりにくさもあって、収納率は低くなっている。
- ・協力金の使途はトイレの維持管理、特に避難小屋に付帯するトイレのくみ取り費用として使用している。し尿は以前、現地において土壌埋設をしていたが、年間6万人から7万人の利用者があり、分解が間に合わず、平成20年度からポリタンクに移し替え、人力で搬出する作業に変更した。令和元年度までポリタンク5万5千本相当の量のし尿を搬出した。
- ・協力金を支払った人には木製の協力者証を発行している。この協力者証を協力店で提示することにより、ドリンクサービスや物販の割引が受けられるシステムを通じ、協力者が千円分以上のサービスを受けられるような仕組みを構築している。
- ・協力金を開始した初年度である平成29年は7千7百万円もの収受額があり、収受率は79%で支出後も1千8百万円ほどの繰り越しがあったが、平成30年の職員による横領事件、令和元年の自然災害、今年度のコロナ禍により収納額が激減した。収支においても、経常的な事業内容が多いため、屋久島町が一般財源で赤字補填をしている。
- ・協力金横領事件は収納した職員が屋久島町の銀行口座に振り込む際、着服したというもので、現在、協力金制度の信頼回復に向けて努力している。

#### ■北海道大学大学院農学研究院 愛甲准教授（コーディネーター）

- ・率直な説明に感謝。屋久島の事例では基金を作っていることが良いと感じた。年ごとの天候等によって、収受額には変動があると想定されることから、基金によって継続的な活動ができること、また、無人化によるコストダウンがなされたことも評価できる。加えて、協力金を支払った人にメリットがあるよう、観光事業者との連携が図られていることも、良い点だと思う。大雪山においても参考になる示唆をいただいたと考える。
- ・ここで大雪山において協力金を導入するとしたら、どのような方法がいいか、課題も含めパネリストから意見をいただきたい。特に料金への上乗せによる収受は観光事業者から抵抗感があるという話を良く聞くが、その辺を事業者である植田社長にうかがいたい。

#### ■（株）りんゆう観光 植田社長

- ・協力金をロープウェイの料金に上乗せすることに関しては、効率的であると考える一方で、民間事業者には、高額化による利用者の低迷を招くのではないかとこの怖れがある。個人的には黒岳の山城や温泉によって商売が成り立っているのだから、民間事業者にもビジョンである未来

に「つなげる」責任があると思う。黒岳にはチップ式のトイレ募金箱もあるが認知も低く、強制力はない。また、多くの登山口をもつ大雪山はすべての登山口を有人化して収受するというやり方も現実的ではない。思いつきではあるが、例えば大雪山で商売をしている事業者間で収入の1%を保全に充てる等の、仕組みを通じて協力するという方法もあるのではないか。大雪山の保全に貢献しているということが企業イメージの向上やステータスになるとも考えられる。民間事業者の貢献のあり方を今後も模索していきたい。

#### ■北海道大学大学院農学研究院 愛甲准教授（コーディネーター）

- ・岡崎氏はヒグマ情報センターの管理業務に携わりながら、募金活動も行い、登山道を補修するという仕事もしているが、その立場から協力金についてどう考えるか。

#### ■一般社団法人大雪山・山守隊 岡崎代表理事

- ・昨年、一昨年とヒグマ情報センターのコース出発前のレクチャーの際、登山道補修のための募金をお願いしている。初年度は紅葉時期の2週間で約30万円。昨年は7月中旬からスタートし、64万円の募金があった。高原温泉は年間来訪者4千人程度と、それほど多くの登山者が来訪する場所ではないので、多額の募金をいただいたと思っている。募金してもらうためには、やはり理解してもらうことが重要なので、理解を訴求するための情報発信が大切だと思う。沼巡りコースは補修箇所も限定的であるため、いただいたお金には余剰が出る。この余剰分を他の場所で使えないか。大雪山は広域で登山口が多いため、入山口別来訪者数に大きな偏りがある。協力金を収受しやすい場所で多く収受し、必要な補修費用に充当することを考える必要がある。加えて、来訪登山者のみならず、クラウドファンディング等を用い、情報発信を通じ、協力者を広く募る施策も必要と考える。

#### ■北海道大学大学院農学研究院 愛甲准教授（コーディネーター）

- ・協力金導入の成果に関する情報発信に関して、屋久島では屋久島町役場が中心となって行っているが、市町を跨がる大雪山ではどうあるべきか。

#### ■一般社団法人大雪山・山守隊 岡崎代表理事

- ・保全と利用はセットと考える。トムソン氏が運営しているような情報発信は利用者の理解を訴求する上で必要であると考え、協議会や公的機関がアイデアを持って発信できるかどうかについては疑問である。今までは保全と利用がつながりを持っていなかったと考える。まず、民間の方で体制を作り、民間と行政が協力して進めていくことにより、利用者が来訪することにより、お金が集まり、価値を高めるという好循環を生み、大雪山のポテンシャルを高めることができると思う。

#### ■北海道大学大学院農学研究院 愛甲准教授（コーディネーター）

- ・鈴木氏に登山者の視点としてお聞きしたい。大雪山において登山者が気持ちよく協力するためにはどのようなやり方が考えられるか。

#### ■鈴木みき氏

- ・協力金に関して、登山者の抵抗はないと思うが、任意の協力金という曖昧な言い方だと、払わない人もいると思う。払った人は払わない人がいる事を不公平に感じる部分もあると思うので、任意ではなく強制の方がいいのではないか。大雪山は山域が広いので、海外におけるロングトレイルの例が参考になると思う。コースを設定し、日数別の入山料を設定し、記念品や認定書を発行する等のアイデアいいと思う。本日出席のパネリストは大雪山との関わりが深すぎるのではないか。本州から来る登山者にとって大雪山は数年に一度しかくることのできないあこがれの山な



ので、保全のためと言われても、縁もゆかりもない山での任意という曖昧な協力金には特に違和感を持つと思う。逆にふるさと納税のような形で、大雪山のファンに対して募金を求める方法、クラウドファンディングやクレジットカードによる事前決済等の決済方法も検討の余地がある。支払った金額に応じたノベルティがあると楽しい。どう収受するかではなく、払って良かったと思える仕組み作りが大切だと考える。

#### ■北海道大学大学院農学研究院 愛甲准教授（コーディネーター）

・YOUTUBEには参考になる多くの書き込みが届いている。トムソン氏は外国人としての視点からどう思うか。

#### ■ロバート・トムソン氏

・鈴木氏の意見に賛成。ネット決済がいいと思う。特にロングトレイルを目的として海外から来る登山者は装備の準備や情報収集も怠らない。良識ある登山者であれば入山許可（パーミット）が有料である事は自然に受け入れる。入山前の装備のチェックリストにはパーミットが含まれるため、協力金のような話が延々と続いていることは不思議だと思うし、入山が有料である事は当然として捉える。いかに支払いやすくするかが、重要と考える。

#### ■北海道大学大学院農学研究院 愛甲准教授（コーディネーター）

・木原氏に伺いたい。情報発信も含め、地域やガイドの協力も含め、工夫していることはあるか。

#### ■屋久島町 木原統括係長

・ガイドには協力金に関する声かけをしてもらおうよう、お願いしている。世界遺産になった事により、逆に住民の関心は薄れているように思う。住民からの来訪者への声かけは不足している。

#### ■北海道大学大学院農学研究院 愛甲准教授（コーディネーター）

・地元の協力が大切である事は理解できる。時間も迫ってきたので、今までの議論を聞いた上で、榊所長はどう思い、これからどのようにしたいかについて話しをしていただきたい。その後で参加者全員から一言ずつ、コメントをいただきたい。

#### ■大雪山国立公園管理事務所 榊所長

・支払い方法も含め、多様な機会をつくるのが重要だと感じた。ネットや現場での収受のみならず、掘り下げて考えればもっとアイデアが出ると思う。利用者と一緒に作って行く協力金を実現するため、そのための情報発信が大切。情報発信の高度化されたものが演出であり、現体制でいえば、大雪山国立公園連絡協議会がその役を担う立場にあると思うが、トムソン氏が発信しているような高度なレベルを求めるのであれば現状の協議会では能力が足りないと思う。次の展望としては、実行部隊として自然公園法で言うところの「公園管理団体」を立ち上げる必要があると考える。そこに民間からの知恵も取り入れ、高度な情報発信を含めいろいろな取組を実施したい。

#### ■北海道大学大学院農学研究院 愛甲准教授（コーディネーター）

・今後、大雪山で何がしたいか、パネリストに伺いたい。

#### ■鈴木みき氏

・登山者として大雪山のことをもっと知りたいと思った。今日のディスカッションで問題点等も聞くことができたので、そういう視点で次回は訪れたい。自分ができることから考えれば、登山道整備のツアーも今夏実施したい。登山道整備の楽しさ、ファン、リピーターを増やしたい。

#### ■一般社団法人大雪山・山守隊 岡崎代表理事

・本日参加して良かったと感じる。専門家の感性を聞くことができたのが良かった。いままでは整

備専門だったが、今は人と人をつなげなければ意味がないと思っている。今日もいろいろな人とのつながりができたが、利用者と管理者を繋げるのが山岳関係者の役割だと思った。

■(株)りんゆう観光 植田社長

- ・コロナ禍の影響を受けているが、関係者は魅力の発信をし続ける必要があると感じた。つながりを広め、できることを模索していきたい。

■ロバート・トムソン氏

- ・コロナ禍にある今こそ、投資をするべきである。情報発信や、コンテンツ作り、整備等、次のための準備をすべきと考える。

■北海道大学大学院農学研究院 愛甲准教授(コーディネーター)

- ・トムソン氏のプレゼンテーションで一番印象に残ったことは、インスピレーションという言葉が含まれていた事であった。登山者に響く仕組み作りが大切。登山者、事業者、地元の住民がつながることにより、ビジョンを果たしていくと考える。パネリストの参加に感謝。

## 6. 閉会

■北海道地方環境事務所 所長 安田直人

- ・コーディネーター、講演者、パネリスト、ビデオ出演者、およびオンラインも含めたシンポジウム参加者に感謝。
- ・シンポジウムを聞いて日本の国立公園は、運営、利用の自由度が高いと感じた。それは良いことだが社会の変化などにより、従来そのままでは国立公園の管理運営が難しくなっているのだと思う。
- ・国立公園は地域や国にとっての宝であり、誇りでもある。うまく使うことによって、それが資源となり、持続的な活用ができると考える。協働の方法も様々あるが、合意形成を図っていくことが基本的に重要。国立公園は、地域を元気づける、地域の利益になるツールであることも重要。
- ・今日のシンポジウムも踏まえビジョンと体制のキックオフが実現できるよう関係者と協力していきたい。

以上